

昭和3年、天理中学校の校友会活動(昭徳会)が発会する。その中に相撲部は正式に置かれなかったが、昭和13年から15年の学校日誌に天理中学校主催相撲大会の記録が残っている。昭和14年には「天中主催全国中等学校角力大会天中角力場に開催、本校力士出場」とある。昭和15年、「天中主催関西中等学校相撲大会に本校力士奮闘し優勝戦において此花商業学校に惜敗す。」とあり、大規模な大会が開催されていたようである。

戦後間もなく、戦地へ出征していた教員たちが復員してきた。農事部主任の市原定七先生も復員した。昭和21年春、牛舎の近くで相撲を取って遊んでいた農事部生の上田隆祐氏、佐々木利範氏に「おい、土俵を作ろうか」と言い、この日から土俵作りが始まった。土運びから始まり、完成した頃には数十名が相撲を取るまでになっていた。しかし、農作業が終わってからの練習の辛さ、空腹感に耐えかねてやめていくものも多く、部員集めに奔走したが最後に残った部員はたった5名であった。上山茂氏、佐々木利範氏、田中(改姓:上田)隆祐氏、上野健三氏、佐藤藤夫氏である。

その後、橋本弘氏も入部し、試合に出場できるぎりぎりの人数となった。市原先生は何処からかまわしを仕入れ、土俵が出来上がると早速、相撲大会に向かって稽古が始まった。当時の練習スケジュールは、作業前1時間、作業終了後1時間の1日2回であった。

昭和21年秋頃から各種大会に出場をし始め、活動も軌道に乗って来た頃、竹村菊太郎校長が出身地の田原本から元力士の大和錦関をコーチとして招いた。廃業しているとはいえ、元力士の胸を借りての練習は激しく、一段と練習に弾みがついた。昭和22年秋、奈良県中学校体育大会に参加し、見事に優勝を果たした。市原先生は大変喜んだようである。県大会の優勝は創部以来初めてということで、部員たちは校長室に招かれて祝賀会を行った。その後すぐに、市原先生宅でもすき焼きでお祝いをした。当時の部員たちには一生忘れられない味となった。竹村校長も大変喜び、部員たちを全校生徒の前で表彰した。その後も猛練習が続いた。

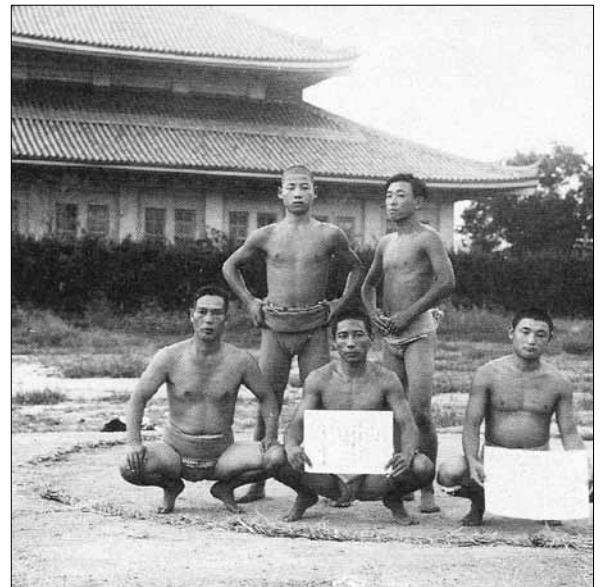
昭和23年4月、新制天理高等学校第二部第1回入学式が行われ、相撲部も正式に創設される。この年、近畿大会に佐々木、上野両氏が出場。秋には第3回国民体育大会(国体)福岡大会に同両氏が県代表に選ばれる。上野氏はこの快挙にまるで夢心地のようであったと語っている。この頃の相撲部は県内の大会ではたいてい優勝し、常勝天理の名をほしいままにしていた。

昭和24年の第4回東京国体は上野氏が出場、奈良県大会では団体優勝、西日本大会にも出場し、上野氏が3位入賞。昭和25年には近畿大会で団体準優勝に輝く。第5回名古屋国体には山本氏、町田氏が出場。昭和26年は山本氏、蓬田和志氏が第6回国体に出場。西日本大会には3回戦まで進むも強豪校に惜敗した。この頃は全国高校総体(インターハイ)はなかったので、高校生にとっては国体の代表に選ばれることが最大の憧れであり目標であった。昭和27年第7回福島国体に蓬田氏が出場し、翌年と合わせて3年連続出場の偉業を成し遂げた。

昭和28年、奈良県高校総合体育大会(県総体)相撲の部で

山添、蓬田、奥林茂各氏が出場し、団体優勝。近畿大会でも団体、個人で優勝し、初めて全国高校相撲大会に奈良県代表として出場を果たした。さらに、第1回アマチュア王座決定戦に個人、団体優勝。第8回四国国体にも山添、奥林の両氏が出場をする。

昭和29年にも県総体で宮本明氏、藤田実氏、奥林を擁して二連覇を果たす。また、全国高校相撲大会にも出場を果たし、第9回北海道国体にも宮本氏、奥林氏が出場するなど相撲部の黄金時代といえる2年であった。蓬田氏、藤田氏はラグビー部にも所属し、二足のわらじを履き奮闘した。蓬田氏は社会人の近鉄ラグビー部に所属し全日本選抜選手としても活躍。後日談として蓬田氏は二足のわらじを両立させるのは、朝は相撲の練習、夕方はラグビーの練習と非常に困難を伴ったが、相撲で鍛えた身体や立ち合いの突っ張りといった技術が、その後のラグビー選手生活で非常に威力を発揮したと語っている。



昭和24年秋 前列左から市原先生、町田氏、上野氏。
後列左から蓬田氏、山下氏



農事部別所農舎内にあった相撲場 昭和29年4月